



第2部／基調講演

『ロータリーらしさ…』 講師：森 三郎



～講師紹介～ 木村 卓司

講師の紹介を申し上げます。

森先生は京都帝大を出られて大蔵省あるいは専売公社と、大変華やかなキャリアでございまして、一々口頭で申し上げると長過ぎるので紙にしたためました。よくごらんいただきたいと思っております。

現在は趣味を生かされて、陶芸の山吹工房を主宰しておられます。大変多芸・多趣味でいらっしゃる、茶道・連句などを能くされ、神官のご資格もお持ちと伺っております。非常にマルチタイプの方でございます。

ロータリー歴につきましては、主なものだけ申し上げますが、1991-92年度第2570地区ガバナーを務められました。当地区で申しますと牧内パストガバナーと同期と承っております。このときに全クラブ公式訪問し卓話をされましたが、同じ卓話は一度もされなかったというのは有名なお話でありまして、その卓話を収録したものが著書の『私のロータリー』（邑心文庫刊）です。その後『ロータリーの友』に非常に深くかわられまして、副委員長、委員長を歴任されましたが、ちょうどこの間私も『友』の常任委員を仰せつかっております大変ご指導をいただきました。それでガバナー補佐を拜命したときから、1Mのときには森先生にお話をいただきましたものだと考えて、早速お願いをしました。

ご快諾をいただいたのですが、実はその後いろいろとご不幸がございまして、余りそれには触れるなどと言われておりますので手短かに申し上げますと、今年1月に先生は転倒されて入院され、暫く療養を余儀なくされており、現在も全快とは言えない状況と承っております。加えて5月に奥様が全くのアクシデントで急逝されました。私も大変驚きまして、お願い事をしてあるけれどもどうなるかなと心配をしておりましたが、夏の終わりごろお伺いしたところ、1Mの行われる12月までには何とかなるだろうということで、ご無理をお願いした次第です。

先生本当にありがとうございます。とにかく私は先生のお話を幾度か伺っておりますが、ロータリーとは一体何だろうか、自分がロータリアンであるとはどういうことだろうか、ということを考えさせるようなお話をしていただける方だと、こう私は認識しております。今日もそういうことで感銘深いお話が伺えるものと思っております。どうかよろしく願いをいたします。

以上、紹介を終わらせていただきます。



基調講演  
『ロータリーらしさ』

講師：森三郎

〈ロータリーの語り部〉

実は私は、木村卓司さんに対して非常な恩義を感じております。と申しますのは、私自身が大病をし、退院してきた途端に家内が急逝したということで、二重の不幸に見舞われ、思ってもみなかった独居老人の身の上になってしまいました。その間今日までどうやら元気を保ち続けてまいることができたのは、本日この席で講演するという宿題が前にございますために、人並みの生きる意欲を保持することを得たのだと思えます。

もしも本日の機会がなかったなら、今ごろは日向ぼっこ以外に任務のない年寄りに、あるいはなっていたかもしれないかもしれません。しかしようやくこれをきっかけにして、私は再び「ロータリーの語り部」としての歩みを開始できるかと思えます。その点で木村さんに心からお礼を申し上げたいと存じます。

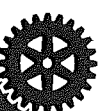
今私は「ロータリーの語り部」と申しました。それはロータリーに対して具体的行動の上で取り立てた功績を残すことは何もできない、という意味であります。それとは対照的に先ほどご挨拶されました田中作次さんは、文字どおり「ロータリーの実行者」として顕著な業績を上げておられる方です。こういう方を前にしてお話を申し上げるのは気の重い

ことですが、所詮私は「語り部」に過ぎないと思いつめて、本日は日ごろの思いを述べさせていたきたいと思えます。

本日が迫るにつれて、私の心の中ではロータリーの様々な側面に発見・気づきがありました。まるで磁石に電流が通ると、周りの金属を引きつけるのと同様に、普段なら聞き過ぎてしまうような話が、不思議なベクトルにからめ取られて、全て本日の話の材料の意味合いを見せて意識に上ってまいります。ことによると、これが「クリエイティブ・アウェアネス」という言葉の、もとの意味ではないか。問題意識があるから課題が見えてき、それによって行動が促される。その意味で、問題を抱えることはロータリアンの出発点であり、もし宿題を全然持たなかったら、ほとんど惰性によって動くだけのロータリアンになってしまうと思えます。私は「ロータリーらしさ」という大変厄介な宿題を与えられていたお蔭で、ロータリーに関して「心の張り」を感じ、緊張感の中でここ数ヶ月を過ごすことができました。例えばNHKの「ラジオ深夜便」という番組を、たまたま朝4時に目が覚めたときは聞いているのですが、先日これを聞いて感動いたしました。ようやくロータリーらしさとは何かという「解答」の一部が仄見えてきたような気がいたしました。本日はそのこともお話しできたらと思っております。

〈ジェントリー・イン・マナー〉

私がガバナーにノミネートされた1990年、そのとき私は奇妙に心がへりくだりました。それまで気負い立っていた肩の力がすっかり抜けて、ヤスリをかけた玉石のように角が取れて丸くなり、素直な赤ん坊に近い精神状態がふいにやってきた気がいたしました。それであるクラブを訪れたとき、真っ先に感じたのは、目の前の人々が限りなく深い考えや感じ方を持った人々ばかりだな、という感銘でした。なぜかとてつも



なくフレッシュに映ったのです。そして「ロータリーは人材の森だ」という強い確信に打たれまして、「人材の森ロータリー」という考え方はその後の私のロータリー観の核となり、テーマとなりました。

「人材の森ロータリー」という一種の悟りを獲得すると、どこへ行ってもクラブの中にどんな素晴らしい人が隠れているか分かりません。実にロータリーは深い森の奥へ分け入った旅人のようなもので、すぐ近くに桁違った偉い人材がいなくても限らない、そういう国際的組織なわけです。そのことを誰かから教わったのでもなく、勉強し分析して気付いたのでもなく、突然私は自分の体で悟ったわけですね。これも一種の「クリエイティブ・アウェアネス」だと思えます。そのとき私は吉川英治の座右の銘「吾以外皆我師」を、なるほどと得心し、完全に胸に落ちた思いで受けとめたのですが、自来これを自分のテーマとしてロータリーを考え、語り、今日まで来ております。

ラテン語の諺を英訳して、「ジェントリー・イン・マナー、ファームリー・イン・アクション」という言葉があります。「態度は優しく、行いは断固として」です。これは普段威張っていて有事には腰砕けになることの反対です。平素は穏やかな人柄でありながら、困難に際しては断固として実行する。これもロータリーらしさの一つであります。

〈杉山よりも雑木山〉

「人材の森ロータリー」という視点でアンテナを張っておりましたら、無着成恭さんの詠まれた俳句で「山笑う杉山よりも雑木山」という句に出会いまして、ハッとしました。この句の意味は、春になり草木が芽を吹いて山の色合いが明るく笑うように生き生きするということですが、それは雑木山だからこその姿でして、杉山は黒々と黙って立っており寂しいものだという事です。

この句に接して、私はふと自分の過去を振り返りました。というのは、

私は大蔵省にいましたが、当時の大蔵省はエリート養成機関という色合いの濃い役所でした。役所の中の役所と言われていました。ちょうど杉や檜を育てるように、有用な人材をスクスクと育てる場所でした。しかしそういう育てられ方をした人というのは、黒々とした杉山のようにいつも心を動かさずにいる、感情を顔にあらわすことなく平常心で薄笑いでいる冷たいイメージの人柄になるのではないかと思われます。典型的な大蔵官僚とはそういうもので、春になってもう一向に声を上げたり跳びはねたりしない、杉山に似た落ち着いた重厚な人柄であります。それはそれで必要な資質だとは言えますが、雑木山は春になると歓喜の叫びを上げて大声で歌い始めますね。

ある日、日本人唯一のRI会長経験者でいらっしゃる向笠先生とお会いしたとき、その話を奥様にいたしましたら、向笠先生は「森さんそのとおりだよ。杉山には茸も生えない」とおっしゃいました。後で伺ったら、向笠先生は茸の専門家だそうで、杉山にはほとんど茸も生えないのは本当だということです。ひるがえって雑木山には、今「里山」という言葉が流行しておりますが、様々な生き物がいて様々な喜びを謳歌し、相互に影響し合いつつ次々と世代を重ねていきます。中には藁のように横に這うものもいますし、見る見るうちに伸びる木もあれば、ゆっくりじっくりと伸びていく木もある。千態万様であることによって雑木山は元気が保たれており、もしも同じ種類の木がそろってしまったら、山の命もそれまでの話です。可能な限り多種多様な人が含まれていることが、組織には好ましいのだという意味で、私は「山笑う杉山よりも雑木山」の句を頭において、ガバナー時代には各クラブに「山も動け」とエールを送りました。杉山にはなりなさんな、多少変わり者がいようと大歓迎するという気持ちでクラブライフを豊かに楽しんでください、と訴えてきた



わけでありませぬ。

ロータリーらしさの一つには、「様々である」ということが一つあると思います。どのクラブに行っても同じ顔のロータリアンばかりでは、本当のロータリーの姿ではない。ユニークな特色ある方々が様々な組み合わせで存在し、内部からエネルギーが吹き上げてくる姿が本当だと思うのですが、そういう視点から申しますと最近のロータリーの姿は、いささかそこから外れてしまっていて、同じタイプの人を生み出す組織になってはいないかという気がいたします。

〈ピラミッド構造から脱出せよ〉

それを私は「グライダーの大編隊」と呼んで、「ロータリーよ目覚めてくれ」と訴えております。

これは私が夢ともうつつともつかぬ状況で思い描いた印象なのですが、地平線の彼方に初めは小さくて、どんどん大きくなる飛行機の編隊が見えてきて、やがて空を覆うばかりの大編隊となったのに、さっぱり音が聞こえないのです。なぜかと思ったら、全部グライダーであって、先導機にケーブルで引っ張られている編隊でした。

つまり私は、小さくとも一つ一つの飛行機がエンジンを持っておればこそ、地形を読むことも必要ですし、気流を見定めることも必要ですし、方位を計ることも必要です。そういう役割を通じて様々な人材が育つわけでありませぬけれども、先導機にケーブルで引かれているのではそれらは一切なく、上からの情報・指示命令だけを頼りに1年間を飛んでいるのだとしたら、そこには機長も操縦士も機関士も何も育ちませぬ。私はロータリーがそういうものに近づいてきてはいないかと感じ、ロータリーにピラミッド構造はない方がいいと考えております。ところが、外国ではどうか分かりませぬけれども、日本のロータリーにあってはとかくピラミッド構造を思い

描きがちであり、私どもはピラミッドの中にいる方が安心なのです。ガバナーの下にガバナー補佐がおり、その下にクラブ会長、その下に各委員長、その下に各委員がいるという構造はロータリーらしくありません。「森よ動け」という立場から申しますと、会長も新入会員も同じ立場で物が言えるようでないといけません。ところがあの人は次期幹事である、次期会長であるとピラミッドを描いて、その中で自分を位置づけて納得するという心情と、先ほどのグライダーの大編隊とは、同じことを裏と表から言っているのに他なりません。

もしもグライダーでなく、各クラブがそれぞれ独自のエンジンを持てば、ピラミッド構造ではなくなるはずです。そのかわり地域のニーズを掘り起こしたり、例会を楽しくする点でも、各々の工夫が生まれるはずです。にも拘らずそうならないところに、今日のロータリーが背負っている宿題があるのではないのでしょうか。その点に気づき、R Iからの指示を待つだけではない、自前のエンジンによる自律的活動を生み出してこそ、「山笑う」の俳句に見られるような個性あふれる木々になれるのです。桜は桜、楓は楓、樟の木は樟の木のそれぞれの持ち味を十分に発揮しつつ、山全体で大らかに春を謳歌するような、そんなクラブになっていただきたいと思っております。

〈サービス=奉仕ではない〉

それでは、なぜロータリーがピラミッドになってしまったり、音のないグライダーになってしまったりしているのかについて、語り部の立場から思い当たることをお話ししたいと思います。

その一つに「奉仕」という言葉があります。私どもは奉仕という言葉は何気なく、当たり前に使っておりますが、外部の人から見ると、軽々しく奉仕を口にすることは大したことをしてはいないという思いが先

に立つようです。「ロータリーは奉仕団体だ」と言いながら、心の隅では苦笑している向きがないとは申せませぬ。

奉仕は「サービス」の訳語です。喫茶店でコーヒーを出すのもサービス、「今日は」と挨拶するのもサービス、テニスで最初の球を打つのもサービスです。人と人が暮らしている限り、サービスは当たり前行為なのです。日常的な普通なことがサービスで、これなくして生活は成り立ちませぬ。ところがこれをもっともらしく「奉仕」と訳したときから、私たちは妙な道を歩くことになったと思うのです。

私どもは人間として当然のことをどなたにも負けずに実践していますが、それを「奉仕」という言葉に置き換えてしか表現しないために、世間からあらぬ誤解を受けています。つまり、世間の人は「自分たちだってロータリアンのようなことはやっているよ。でもそれを大仰に「奉仕」だなどと宣伝しないだけでよ」と考えます。ロータリーがものものしく奉仕を唱えれば唱えるほど、いつまで経っても日本社会からは「よそ者」の印象を拭い去ることができないのです。ですから米山梅吉先生は、飽くまでもサービスで通しました。つまりサービスに相当する適当な日本語がないということです。

私は先ほどのご紹介にございましたように、神主の修行をいたしました。そのときに奉仕ということを学びました。それは「神様にお仕えること」という意味の奉仕です。人間に何かしてあげることを奉仕とは呼ばないのです。我々は何気なく「奉仕、奉仕」と言っている、外部の人からは異様に聞こえます。今では「サービス」の語は日本社会に定着しているので、むしろこれを使って、軽々しく奉仕とは言わないことをお勧めしたい。我が国には「愛語」「顔施」など様々ないい言葉が仏教語にありますけれども、これを奉仕という一語に括ったためにご大層なことになってしまったように

思います。

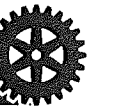
なおかつ「アイデアル・オブ・サービス」の「アイデアル」を除いてしまい、あるいは「サービス・アバブ・セルフ」の「アバブ・セルフ」を考えもしないで、奉仕の一語で一切を言い尽くそうとしている感があり、これが大きな誤解のもとになっています。日本がロータリーを受け入れたときに、サービスを奉仕と翻訳してしまったのは「大ファウル」であったと私は思います。これをもとへ戻さなくてははいけません。それには「アバブ・セルフ」の意味を考究して「アイデアル・オブ・サービス」の本当の姿をつかまなければなりません。そして私どものロータリー観を一度洗い直すことが大切です。

〈世界の大本思想との対話〉

無反省に奉仕活動を叫んでいると、「それではボランティア活動とどう違うのだ」ということになります。確かに現行のロータリー活動と一般のボランティアとの区別はつけづらい状況だと思われませぬ。しかし、一体どこにロータリーの独自性があるのかを明確にさせないと、標題の「ロータリーらしさ」は一向に浮かんでまいりませぬので、少しそのことをお話し申し上げます。

まず「サービス・アバブ・セルフ(超我の奉仕)」とは、己れを二の次に置いたサービスのことで、宮沢賢治の「雨二毛負ケス」という詩の中に「自分ノコトヲ勘定ニイレズ」とありますが、それが「アバブ・セルフ」の簡明な理解の仕方です。それをさらに深めて、自分を無にする道をどう追究すべきかと、私もしきりに考えたのですけれども、考えれば考えるほど漠然としてまいりました。自己無化とは自己否定でしょうか、自己犠牲でしょうか、賢治の語る「デクノボウ」の精神はどうしたら得られるのでしょうか。なかなかこの解答を得ることは難しいことでした。

そこで次に、ロータリー精神は世



界思想の中で片隅の偏狭な思想なのか、それとも主な思想の潮流に棹さした堂々たる内容を持った思想と言えるのか、それを考えてみました。私が聖書を繰ってみたり、論語に当たってみたりしておりましたら、不思議にも聖書にせよ、論語にせよ、大思想の核心にある最も重要なポイントが、軌を同じうして一つのことに至ることに気が付きました。それは「己れを虚しうせよ」という言葉ではないものの、「アバブ・セルフ」と同義であることは、少し考えれば分かります。

まず聖書では、ゴールデン・ルールと呼ばれているのですけれども、イエスの説教の中で最も大事な部分として「自分のしてもらいたいことは人にもしてやりなさい」という言葉があります。「この道は容易なことでは実践できぬ狭い道である」ということも付言されております。そして論語の中で、弟子が「一生かかって人間が追求すべき行いは何ですか」と問うたところ、孔子は「それ恕か」と答えております。別の章で孔子は恕の説明をしております。「己れの欲せざる所、人に施すことなかれ」と述べております。キリスト教の黄金律といい、孔子の恕といい、非常に分かりやすい教えなのですが、大切な問題を示唆してくれております。それは、アバブ・セルフということとは「自分をなくす」ことではなくて、より大きな自分の中に自分を投入することなのです。そう考えることにより、ロータリーは大思想の間に伍して堂々と胸を張れることになるのだと思われませぬ。

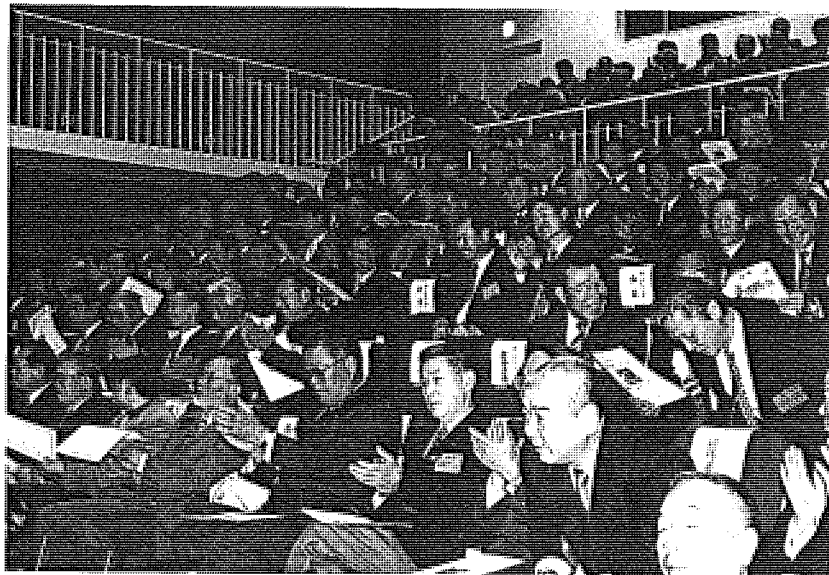
さらに平易にお話しするために、昨年しきりにテレビで流れていましたネスカフェのCMソングをご紹介したいのですが、「オープン・アップ・ユア・マインド」互いの壁を乗り越えて心を開き合おうという呼びかけです。自分を否定したり無にするのではなくて、むしろ垣根を越えて他の人々と手を握るために外へ出ていこう、心を萎縮させるのではなく大きく世界へ広げていこうという誘

いです。かつてR Iのバース会長も「オープン・ユア・マインド」ということを提唱しておられましたが、それは自分の心を徐々に消滅させる方向に進むのではなくて、逆に自分の殻を脱ぎ捨てて積極的に他へと働きかけていく方向に理解していく。これが「アバブ・セルフ」の深い意味であると考えております。自分を超越(超我)というのは自己犠牲でも無我の境でもなく、心の壁を取り去りより広い自分の中に積極的に新しい自分を投入していくことなのだ、ということに気が付くことができれば、ロータリー思想の土性骨をつかんだことになると思われませぬ。「サービス・アバブ・セルフ」という哲学は我々の誇るべき哲学であって、「アバブ・セルフ」を除いた単なるサービスを「奉仕だ奉仕だ」と喧伝しているのは、大間違いであると知らねばなりません。ロータリーの本当の味わいは、むしろアバブ・セルフの方にあるのです。

〈杉原千畝氏の抱いた理想〉

次に「アイデアル・オブ・サービス」についてですが、杉原という戦時中にリトアニアの領事代理であられた方のお話をいたしたいと思われませぬ。杉原氏の奥様が鎌倉にご存命で、感動的なお話をラジオでお聞きしたのでありますが、もっと詳しい経緯を知りたいと思っていたところ、『友』の12月号に須加川の須加さんという神職の方が、杉原千畝さんのことを書いていました。すぐに私は電話しまして「あなたリトアニアまで行ったのですか」とお聞きすると「行きました。あの話に大感激したので飛んでいきました」というのです。それはこういうお話なのです。

ドイツがポーランドへ侵攻してユダヤ人を大量に逮捕しアウシュビッツへ送るという状況下で、リトアニアから脱出して故国へ帰る手続として、日本へのビザ発給をユダヤの人々は切望していました。ある朝目覚めると数百人のユダヤ人が領事館の庭を取り巻いていた。ところが日



本の外務省はビザ発給を許可しない方針です。杉原氏は何干というユダヤの人々を前にしてとことん悩みました。彼らの出国に手を貸したことがナチスにバレれば、自分の身も危険にさらされます。幾晩も転々反側して苦しみ抜きました。しかし彼はある日敢然とビザにサインし始め、次々に幾らでもあらわれるユダヤの人々に対し夢中になってビザを与え続けたのです。しまいには彼自身が出国する段になって、列車の中でまで書き続けて約6千人のユダヤ人の命を救ったのです。戦後数十年経ってから、助けられたユダヤ人が杉原氏を尋ねてきたことからこの事実が明らかになり、幸子夫人が『六千人の命のビザ』という著書を出して、初めて日本人はこのことを知ったのです。

他人の困っているとき手助けするのは人情ですし、普通の意味のサービスです。しかし、ビザを発給したらあなたも逮捕されるかもしれないよという条件が割り込んできたとき、なお敢然として書き続けられるかどうか。これは単なるサービス精神では到底できないことであります。そこに理想の働きが求められるのであり、これが「アイデアル」なのです。ロータリーが高々と「アイデアル・オブ・サービス」を掲げている理由がそこにあります。

昨夜、念のために私が床の中で辞書を引いてみましたが、「理想」とは「実際には実現できないとしても、理念として追求し続ける、物事の最も望ましい状態」のことだとありました。ですから理想は、天の星のように高みで我々の日常とは無関係にあり、ただ見上げるだけの存在であってはならないので、現実の中でその実現に向かって努力し得る程度には近くにある目標でなければなりません。そこが絵空事の空想と違うところでして、理想とは現実世界を動かす力を持った理念のことを指して言うのです。そう考えれば「アイデアル・オブ・サービス」という旗印の重さもよくお分かりになるだろうと思うのであります。

〈一般のボランティアとの違い〉  
それでは「ロータリーらしさ」はどこから来るか、という問題ですが、「アバブ・セルフ」と「アイデアル」の意味を十分に噛みしめることができましたならば、先ほどの「ジェントリー・イン・マナー、ファームリー・イン・アクション」という態度、人様に伍しては謙虚でありながら、いざやるとなったら勇猛果敢ということも、ロータリアンの持ち味として大切にすべきであると思えます。

しからば、一般のボランティアと

ロータリーの違いは何かということですが、私はこう考えます。一つには、ボランティアには職業が入っていません。職業において世の中のお力になるのがロータリーです。職業を「通じて」と言うと、職業を手段であるかの如くに受け取った感じがいたしますが、私どもの職業は手段ではなく目的であると認識しています。ゆえに「職業において」世間のお役に立つと捉えます。これが一般の人の臨時のボランティアとは同日に論じられない、ロータリーのサービスの特色であります。これはロータリー独自のことだと自覚する必要があります。「職業において」という私どものユニークな立場に無自覚なときは、普通のボランティアと同列のものになってしまうと思えます。ですからこれこそは、ロータリーらしさを支える非常に大きな要素の一つになるでしょう。

それからもう一つは、「組織を育て、組織で育つ」という側面です。これが一般ボランティアにはなくて、ロータリーにはなくてはならない事柄です。ロータリー組織で私たちは育ちますが、同時に私たちが組織を育てることがないと、ロータリーではないのです。同様に「職業で育ち、職業を育てる」のがロータリアンです。

私が古いロータリアンにお会いして痛感いたしますのは、組織を育て組織で育ち、かつ職業を育て職業で育った方のみが持っている重厚なお人柄というものです。ロータリアンにはそれがなければ意味がないように思います。職業と組織と、この二つを活動の場として、そこに人生の喜怒哀楽を見出し、そこで自己研鑽を重ね、その二つを愛し、誇りを抱き、クラブライフを謳歌する、そのことにおいてサービスを実践しているのが全てのロータリアンの姿だと思うのです。ご承知のようにロータリーには職業分類の思想がございます。1業種から1会員を選んで仲間にお迎えするという規則になっておりますが、その理由もそこにある

のです。思えば職業奉仕という言葉には今や手垢がついてしまい、新鮮味が乏しいのは非常に残念なことでありますが、それでお分かりになると思いますが、職業と組織で磨かれるという点を見落としたら、ロータリアンのサービスにはほとんど何の独自性も見えなくなってしまうのではないのでしょうか。

〈純金も合金も不可欠〉

耳よりの話を最近聞きました。鶴見の総持管長の板橋さんという方のお話によりますと、道元禅師は純金を求めてご苦労なされた方である。あくまでも純粋に宗教としての禅を追求されたので、言わば純金の思想家である、と。それに対して、能登の総持寺の開祖の義山禅師は、純金に銅などを加えて18金という合金をおつくりになった方である。純金は柔らかすぎて入れ歯にはならないけれども、合金にすることで初めて実用的な金属になった、というのであります。

道元さんの純金思想も大事なものであるけれども、これを世に広め人の役に立つ形にするためには、多少の不純物を混入しなければならない。それをしたのが義山さんだったと、私は解釈しているのです。ロータリーにもそれがあると思えます。例えばポール・ハリスとかフレデリック・シェルドンとかいう人たちの話を噛みしめて味わうことは、言わばロータリーの純金の部分を味わう立場であります。先程私は、自分を語り部であると位置づけましたが、それに対して実行というふうに田中作次バスターガバナーを申し上げました。田中さんはハリスやシェルドンの思想について詳細に話されることはありませんが、実行段階になりますと、身をもってそれを示されて皆様を鼓舞激励されております。これはあたかも、義山和尚が能登の総持寺をお建てになって以来曹洞宗が世に広まったのと同じようなことだと存じます。

どんな立派な思想でも、純金だけ



であつたらこれは世の中には行われにくいのです。それを行われるように身をもって示されたところが、合金の有用性の本当の意義でありまして、それに思い至ったときに私は田中バスターガバナーに心から敬意を表する気持ちになりました。

純金の方から言えば、合金は不純だということになりますが、合金の方から言うと、純金は全然実用的でないという見方もできます。ですから、物事はそういうものだとお互いにそれぞれの持ち味を認め合う、これが恐らくポール・ハリスの唱えた寛容ということの徳であろうと思えます。

先程ロータリーは雑木林のように多種多様であっていいと申しましたが、その前提には寛容の徳がなければ

なりません。このことだけはロータリーらしさの中にどうしても加えなければならないことだというふうに思います。様々な個性があつてこそそのロータリーです。純金の価値が高く合金が低いなどというのは全くの見当違いです。ともに必要不可欠な立場であることを申し添えまして、私の話を終わりにさせていただきたいと思えます。



講師 森 三郎様 経歴

- 大正10年(1921) 埼玉県大里郡寄居町に生まれる  
旧制熊谷中学校、旧制山形高校を経て
- 昭和19年(1944) 東京帝国大学法学部卒業  
大蔵省入省
- 昭和24年(1949) 浦和税務署長
- 昭和32年(1957) 日本専売公社 広報課長・総務秘書役
- 昭和36年(1961) 公社退職
- 昭和37年(1962) 米国広告代理店 J.W.トンプソン・ジャパン 副支配人
- 昭和50年(1975) ニッカン工業(株) 常務取締役
- 平成元年(1989) 退任、現在に至る  
現在は陶芸山吹工房主宰

主なロータリー歴

- 1972年 寄居ロータリークラブ入会
- 1976~77年度 会長
- 1991~92年度 R1第2570地区ガバナー
- 1992~93年度 ロータリーの友 顧問
- 1996~98年度 ロータリーの友 副委員長
- 1998~2000年度 ロータリーの友 委員長
- 2000~01年度~ ロータリーの友 特別顧問

- 趣味 陶芸 茶道 茶道裏千家淡交会副支部長  
連句 連句協会常任理事

- 著書 『私のロータリー』 邑心文庫刊